

平成 23 年の漁況

道根 淳・寺門弘悦

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図 1 に 1960 年（昭和 35 年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化のグラフを示した。

2011 年の総漁獲量は約 10 万 1 千トンで、前年比 139%、平年（過去 5 ケ年平均、以下同様）比 143%であった。近年の漁獲の主体であるマアジ、サバ類は平年並みあったが、マイワシ、ウルメイワシ、カタクチイワシが好調であった。特にマイワシは近年にない程の豊漁であった。

2011 年の CPUE（1 ケ統 1 航海当り漁獲量）は 53.0 トンで、前年・平年を上回った（前年比 134%、平年比 147%）。なお、2011 年の漁労体数は 12 ケ統（県西部 4 ケ統、県東部 8 ケ統）であり、前年と変わっていない。

(2) 魚種別漁獲状況

図 2～6 に島根県の中型まき網による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

① マアジ

マアジは春先の海水温の低水温傾向により来遊時期が遅れ、前年（平成 22 年）と同様に春季（4 月～6 月）は低調な漁況が続いた（前年比 38%、平年比 16%）。一方、秋季（10 月～11 月）は前年を下回り、平年並みの漁況であった（前年比 60%、平年比 103%）。また、例年になく 12 月にまとまった漁獲があった（前年比 655%、平年比 319%）。漁獲の主体は 1 歳魚（2010 年生まれ）で、夏季以降は 0 歳魚（2011 年生まれ）が漁獲に加入した。2011 年の漁獲量は約 2 万 2 千トンで、前年比 92%、平年比 81%であった。

② サバ類

サバ類は主漁期にあたる 10 月以降の漁獲量は前年を上回り、平年並みであった（前年比 142%、平年比 104%）。漁獲の主体はマサバ 0 歳魚（2011 年生まれ）であった。2011 年の漁

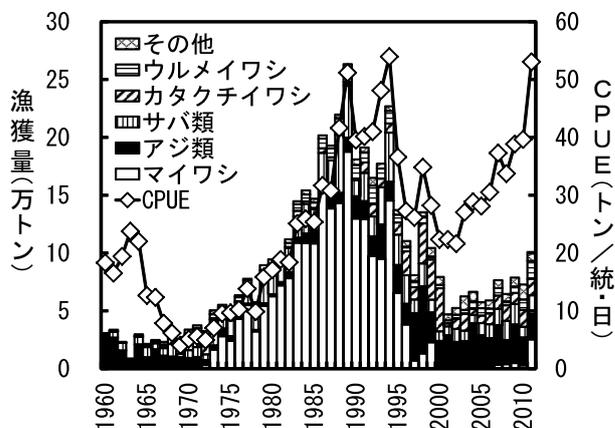


図 1 島根県の中型まき網による魚種別漁獲量と CPUE の推移（2002 年までは農林水産統計値、2003 年以降は島根県漁獲統計システム集計値）

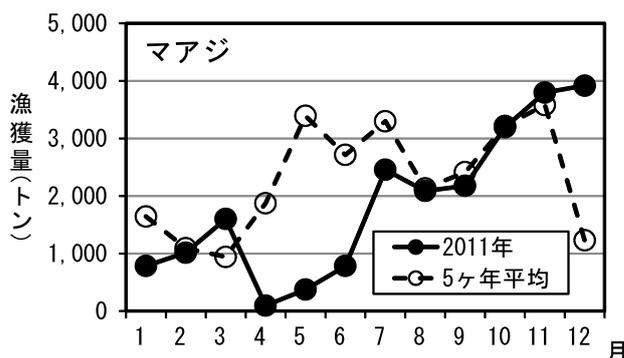


図 2 中型まき網によるマアジの漁獲量

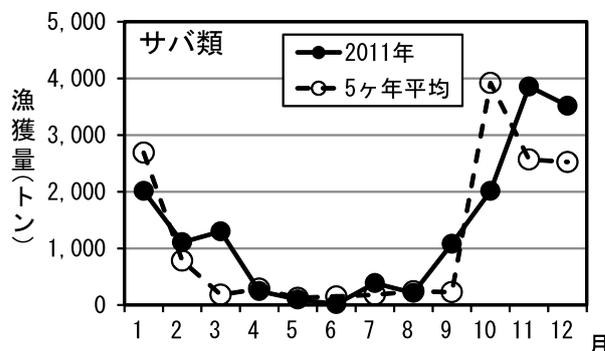


図 3 中型まき網によるサバ類の漁獲量

獲量は約1万6千トンで、前年比171%、平年比114%であった。

③マイワシ

マイワシは県東部を主漁場として春季（4～6月）に2万トンを超える漁獲があった（前年の11倍、平年の20倍）。加えて、秋季（10～11月）にも3千トン程度の漁獲があった。

2011年の漁獲量は約2万5千トンで、前年比863%、平年比746%となり、2万トンを超える久しぶり（2000年以來）の豊漁に恵まれた。しかしながら、漁獲されるマイワシのほとんどが1歳魚（2010年生まれ）であり、1980年代の豊漁時のように複数の年級群によって構成されているわけではないため、資源水準が安定しているとは言えない状況である。

④カタクチイワシ

カタクチイワシは春季（3～4月）に県東部を主漁場として約9千トンのまとまった漁獲があった。加えて、秋季（9～11月）に約3千トンの漁獲があった。2011年の漁獲量は約1万4千トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比91%、平年比121%）。

⑤ウルメイワシ

ウルメイワシは春季の漁獲はわずかであったが、秋季（10月～11月）に県東部を主漁場としてまとまった漁獲があった。2011年の漁獲量は約1万6千トンで、前年・平年を上回った（前年比175%、平年比273%）。

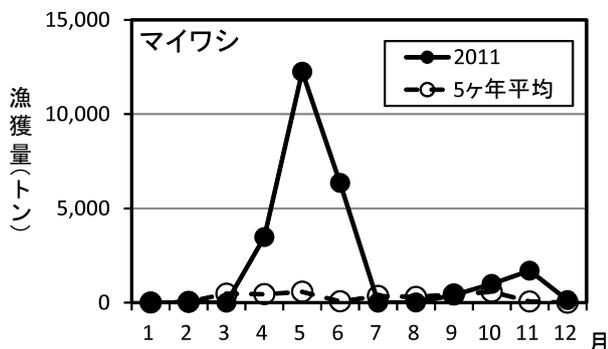


図4 中型まき網によるマイワシの漁獲量

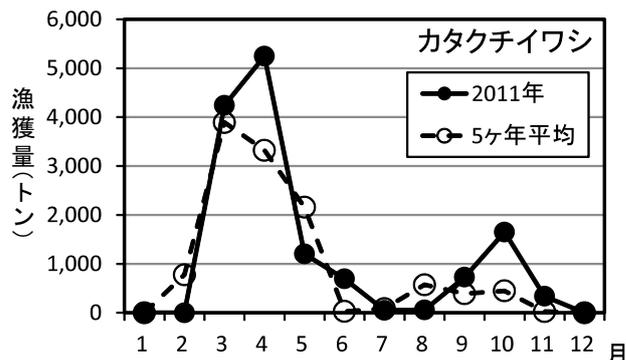


図5 中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量

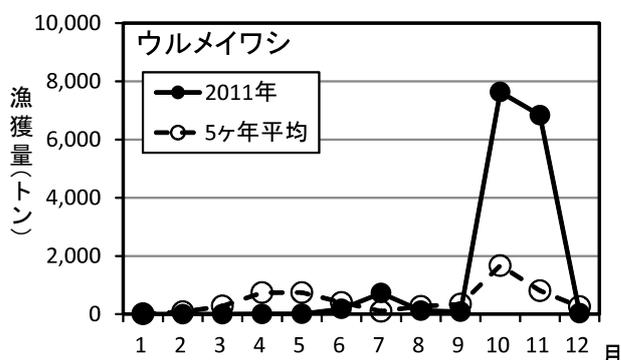


図6 中型まき網によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣り漁業

ここでは、いか釣り漁業（5 t未満船）、小型いか釣り漁業（5 t以上30 t未満船）及び中型いか釣り漁業（30 t以上）によって浜田港に水揚げされたイカ類（スルメイカ、ケンサキイカ）の漁獲動向をとりまとめた。

(1) スルメイカ

浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲量および水揚金額の年別動向を図7と図8に示した。2011年の漁獲量は380トンで、前年（243トン）比156%、平年（553トン）比69%と不漁であった前年を上回ったが、平年を下回った。水揚金額は約1億1千万円で、平年比58%であった。

図9に月別の漁獲動向を示した。例年、冬季～3月は冬季発生系群の産卵南下群が、3月～初夏は秋季発生群の索餌北上群が島根県沖での漁獲対象となるが、近年は両系群の資源状態が良好であるにもかかわらず山陰沖への来遊量が少ない傾向にある。2011年もこうした影響を受け、2009年のような極端な不漁とまではいかなかったが、平年を下回る漁況であった。

(2) ケンサキイカ

浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲量および水揚金額の年別動向を図10と図11に示した。2011年のケンサキイカの漁獲量は1,126トンで、前年並みで平年を上回った（前年比100%、平年比170%）。水揚金額は約6億7千万円で、前年比94%、平年比139%であった。

図12に月別の漁獲動向を示した。近年、特に2006年以降春～夏に漁獲されるケンサキ型の漁況が不調である一方、秋に漁獲されるブドウイカ型の漁況は好調である。こうした傾向のとおり、2011年は8月までは平年を下回る漁況であったが、9月に漁獲量が急増し、それ以降平年を上回る漁況が続いた。

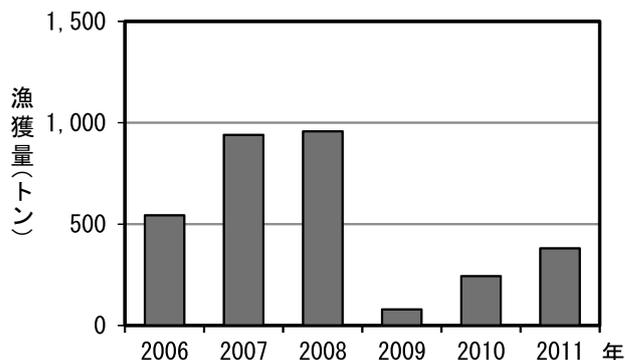


図7 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲量の動向

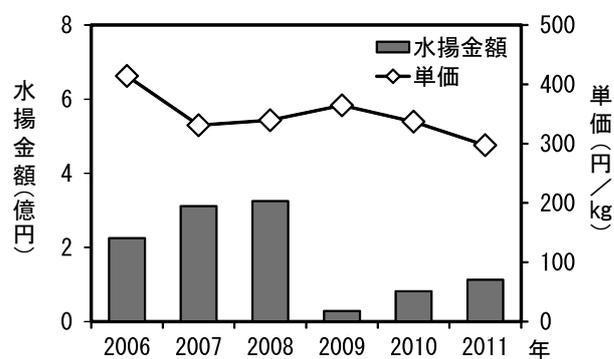


図8 浜田港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の動向

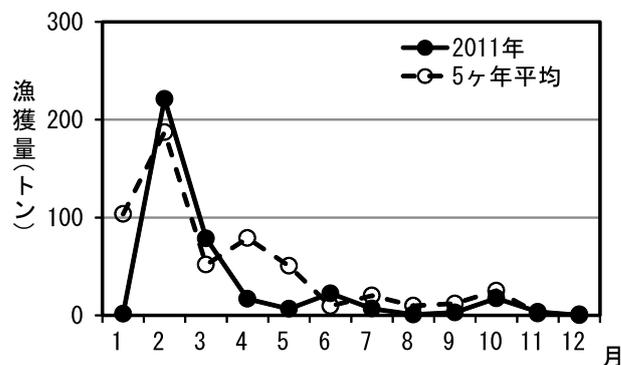


図9 浜田港に水揚げされたスルメイカの月別漁獲動向

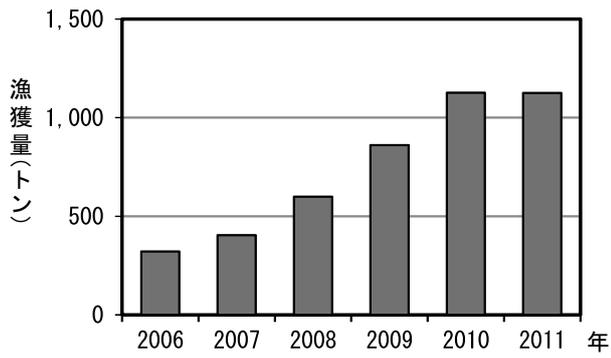


図 10 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲量の動向

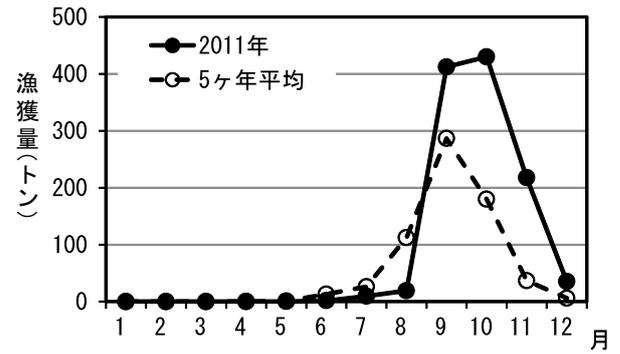


図 12 浜田港に水揚げされたケンサキイカの月別漁獲動向

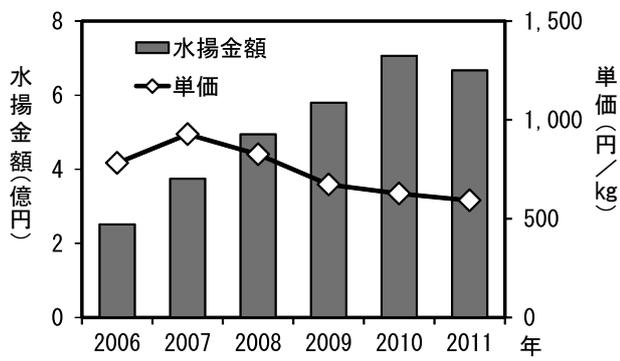


図 11 浜田港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の動向

3. 沖合底びき網漁業（2 そうびき）

本県では現在8ヶ統が操業を行っている。本報告では、このうち浜田港を基地とする5ヶ統を対象に取りまとめを行った。操業期間は8月16日から翌年5月31日までで、6月1日から8月15日までは禁漁期間である。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした。

(1) 全体の漁獲動向

図13に1986年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（以下、浜田沖底という）における総漁獲量と1統当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

総漁獲量は、1980年代後半から1990年代前半にかけて操業統数の減少により急激に減少したが、1993年以降3,000トン台で横這い傾向にある。一方、CPUEは日韓新漁業協定が発効された1998年以降急増していたが、2006年以降は漸減傾向にある。

なお、平成24年4月より漁船構造改革推進事業の取組みとして1ヶ統がリシップ工事に取りかかったため、漁期途中での操業切り上げとなった。

2011年漁期の浜田沖底の総漁獲量は2,900トン、総水揚げ金額は13億5,784万円であった。また、1統当たり漁獲量は600トン、1統当たり水揚げ金額は2億8,286万円であり、漁獲量、水揚げ金額ともに平年並みであった。

※平年（2001～2010年の過去10カ年間の平均値、以下平年という）

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図14にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

ムシガレイは数年周期の増減を繰り返し、1993年までは減少傾向にあった。それ以降は増加傾向に転じたが、2008年をピークに減少傾向にある。2011年の漁獲量は336トン、CPUEは69.3トンで、平年を21%下回った。

ソウハチは1990年以降、大きな変動を示しながら減少傾向にあり、特に2000年以降は急減し、2003年には12トンまで減少した。その後、2005年以降は増加傾向に転じたが、2007年を

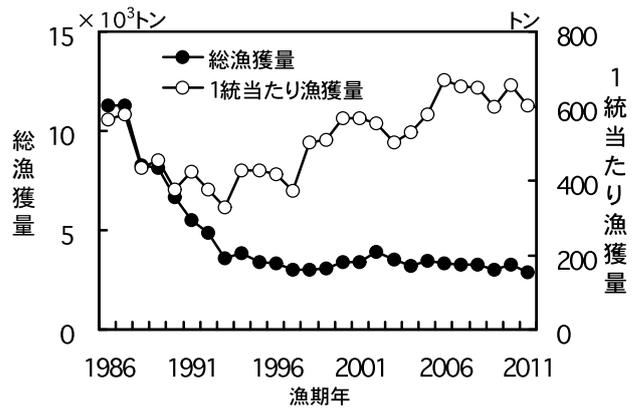


図13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における

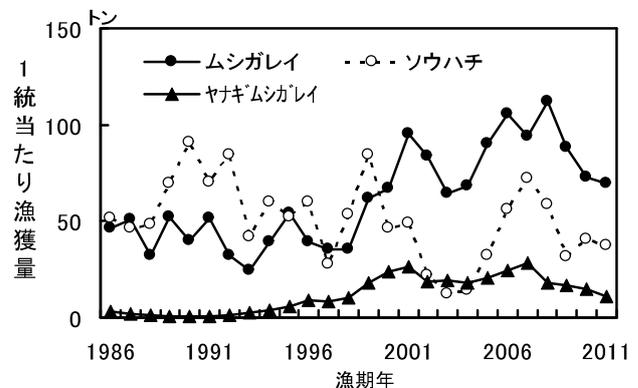


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の1統当たり漁獲量の経年変化

境に再び減少傾向にある。2011年の漁獲量は184トン、CPUEは37.6トンで、平年並みであった。

ヤナギムシガレイは1991年以降増加傾向にあったが、2001年を境に緩やかな減少傾向にある。2011年の漁獲量は52トン、CPUEは10.8トンで、前年を28%、平年を47%下回った。

②イカ類

図15にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカは数年周期で増減を繰り返している。近年では2005年に急減したが、最近では増加傾向にある。2011年の漁獲量は338トン、CPUEは69.3トンで、前年を下回ったが、平年の1.6倍の水揚げであった。今期の特徴としては、秋漁は好調であったが、昨年好調であった春漁は低調に推移した。一方、ヤリイカは1980年代後半より急激に減少し、近年は低位横這い傾

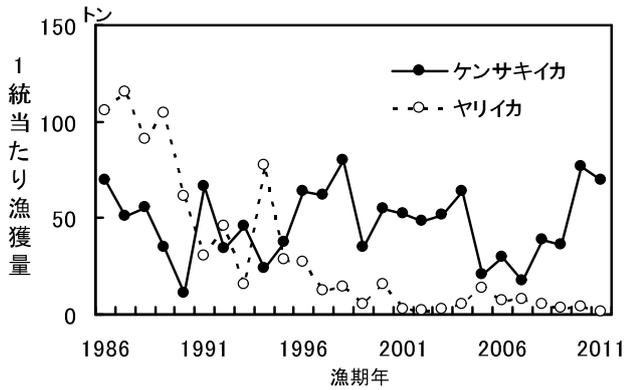


図 15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1統当たり漁獲量の経年変化

向にある。2011年の漁獲量は6.6トン、CPUEは1.3トンで、前年、平年の3割の水揚げにとどまった。

③その他

図 16 に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

キダイは、1990年代は増加傾向にあったが、1998年以降年変動が大きくなり、長期的には増加傾向にある。2011年の漁獲量は276トン、CPUEは57.5トンで、前年を下回ったが、平年の1.6倍の水揚げとなり、2010年漁期に次ぐ高い値となった。前漁期から引き続き、今期も漁期を通して中・大型サイズ（地方名：レンコ）、小型サイズ（地方名：シバ）共に安定して水揚げされた。

アナゴ類は、年変動が大きく、増減を繰り返しているが、長期的には横這い傾向にある。2011年の漁獲量は237トン、CPUEは49.5トンで、前年を下回ったが、平年の1.3倍の水揚げであった。

アンコウは、1990年代以降増加傾向にあり、2007年より減少傾向に転じたが、近年やや回復傾向が見られる。2011年の漁獲量は199トン、CPUEは41.0トンで、前年を15%上回ったが、平年並みの水揚げであった。

ニギスは、1990年代に入り周期的に大きな変動を示し、2005年以降減少傾向にある。2011年の漁獲量は73トン、CPUEは15.4トンで、前年を31%、平年を43%下回った。

アカムツは、1990年代後半以降、3回（1999～2000年、2006年、2008～2009年）急増した時期があり、長期的には増加傾向にある。2011年の漁獲量は96トン、CPUEは20.5トンで、前年、平年の1.3倍の水揚げであった。今期は、休漁明けの8月と春季に小型サイズ（1歳魚）がまとまって漁獲され、その影響により漁獲増となった。

イボダイは、エチゼンクラゲの来遊に伴い漁獲量が増加する特徴があり、1990年代以降、その傾向が数回見られる。2011年は前年に引き続きエチゼンクラゲの来遊がほとんど無く、イボダイの漁獲量は2トン、CPUEは0.4トンで、前年の17%、平年の2%の水揚げにとどまった。

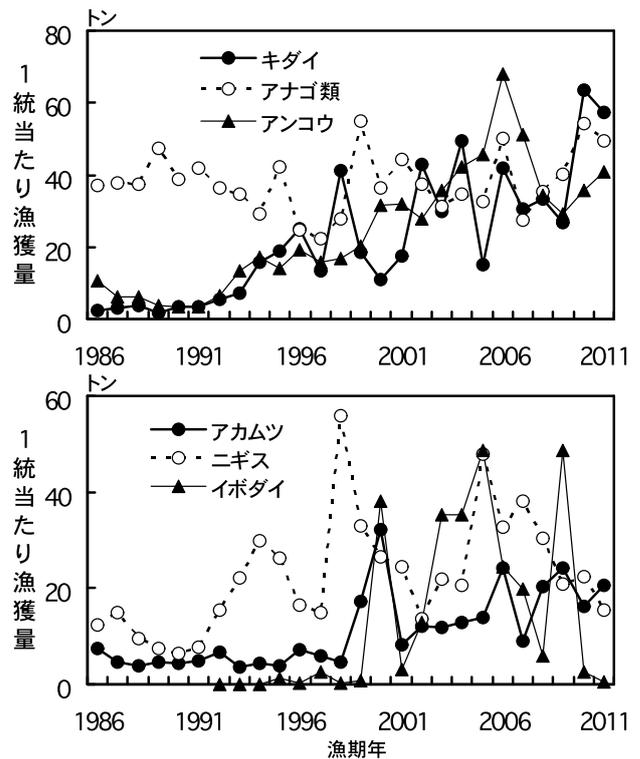


図 16 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化

4. 小型底びき網漁業第1種（かけまわし）

本漁業は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深100～200mの海域を漁場とし、現在52隻が操業を行なっている。操業期間は9月1日から翌年5月31日までである（6月1日から8月31日までは禁漁期間）。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした。なお、1隻はずわいがにかご漁業を兼業しており、漁期を通して操業を行わないため、これを除いた51隻分の集計とした。

(1) 全体の漁獲動向

図17に小型底びき網漁業1種（以下、小底という）における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化を示す。

2011年の総漁獲量は5,692トン、総水揚金額は20億1,226万円であった。1隻当たり漁獲量は92.9トン、水揚金額は3,946万円であり、漁獲量、水揚金額ともに平年（過去10年平均93.0トン、3,823万円）並みの水揚げであった。1隻当たりの航海日数は126日で、前年、平年をわずかに下回った。今漁期は台風、冬季の寒波、爆弾低気圧の影響で休漁、操業途中の反転などがあつたが、休漁明け当初からのエチゼンクラゲの影響もなく、全般的には安定した操業となった。

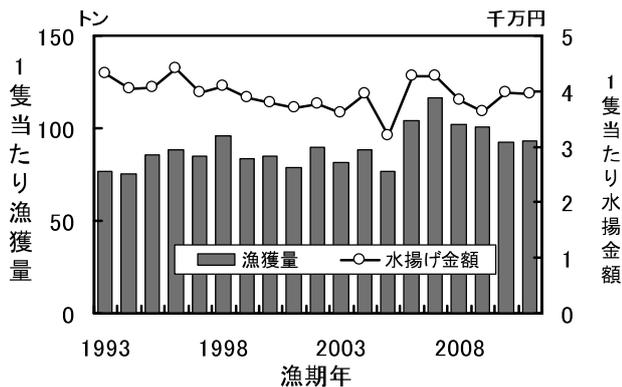


図17 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図18にカレイ類の1隻当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは、沖底の傾向と異なり

横這い傾向で推移している。2011年の漁獲量は188トン、CPUEは3.7トンで、前年を18%、平年を26%下回った。

ソウハチの漁獲量は周期的な増減を繰り返しているが、近年は増加傾向にある。2011年の漁獲量は1,333トン、CPUEは26.1トンで、前年を21%、平年を48%上回った。

メイタガレイの2011年の漁獲量は41トン、CPUEは0.8トンで、前年を40%上回ったが、平年を36%下回った。

また、ヤナギムシガレイの2011年の漁獲量は60トン、CPUEは1.2トンで、前年、平年の7割の水揚げにとどまった。

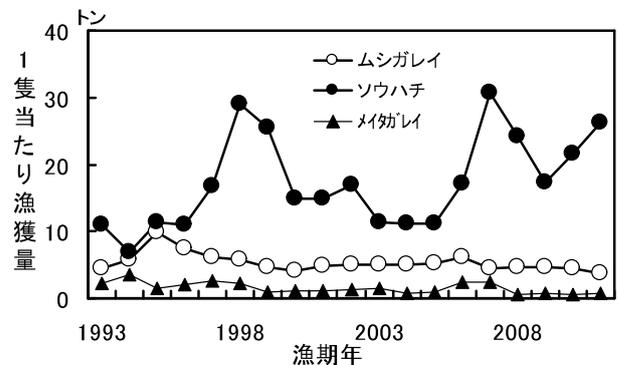


図18 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

②イカ類

図19にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカは、2008年以降、増加傾向にある。2011年の漁獲量は381トン、CPUEは7.5トンで、前年の1.4倍、平年の2.4倍の水揚げがあつた。秋漁が好調に推移し、1993年以降、最高の水揚げとなった。

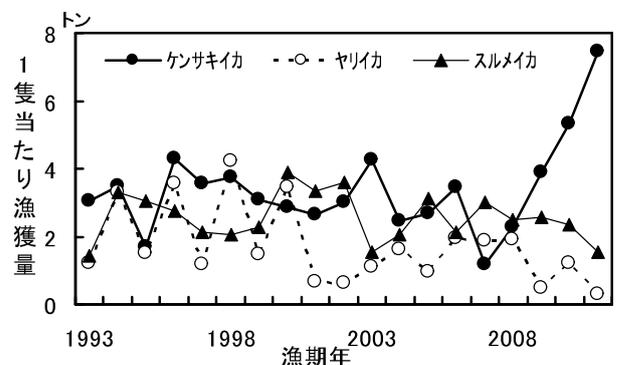


図19 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

一方、ヤリイカのCPUEは2001年までは1年おきに大きく好不漁を繰り返していた。2001年以降、年変動は小さくなったが、漁獲量の水準は低下している。2011年の漁獲量は15トン、CPUEは0.3トンで、前年、平年の2割の水揚げにとどまった。

スルメイカの2011年の漁獲量は78トン、CPUEは1.5トンで、前年を35%、平年を42%下回った。

③その他

図20に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

ニギスのCPUEは1999年に大きく落ち込んだが、それ以後は増加傾向を示している。2011年の漁獲量は624トン、CPUEは12.2トンで、前年を11%、平年を4%上回った。

アンコウの2011年の漁獲量は326トン、CPUEは6.4トンで、前年を30%、平年を19%下回った。

周期的に増減を繰り返しているアナゴ類の2011年の漁獲量は233トン、CPUEは4.6トンで、前年の1.2倍、平年の1.6倍の水揚げがあった。今期は、秋季と切り上げ前の5月にまとまった漁獲があり、それにより漁獲増となった。

近年、増加傾向にあるアカムツの2011年の漁獲量は161トン、CPUEは3.2トンで、前年を24%下回ったが、平年の1.3倍の水揚げであった。

キダイは沖底と同様に大きな年変動を示している。2011年の漁獲量は207トン、CPUEは4.1

トンで、前年の5割、平年の6割の水揚げにとどまった。今期は休漁明けから秋季にかけての漁獲が低調であったのに加え、冬季から春季にかけての漁獲が低調に推移し、過去5年平均と比較したところ、2割～3割の漁獲にとどまった。

ハタハタは年変動が大きく、近年は低水準で推移している。2011年の漁獲量は43トン、CPUEは0.8トンで、平年の5割の水揚げにとどまった。

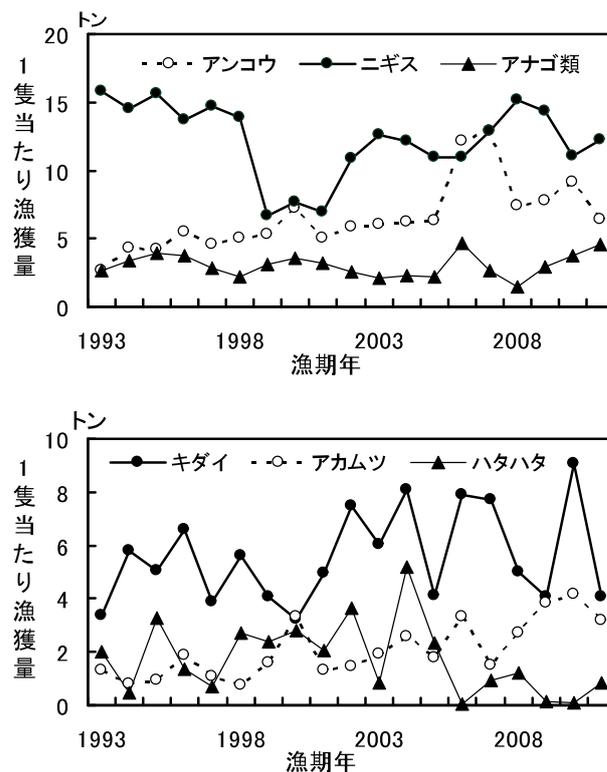


図20 小型底びき網漁業における主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は小型底びき網漁業（第1種）休漁中の6～8月に、本県沖合の水深200m前後で行われる。2011年は石見部5隻が操業を行った。

解析に用いた資料は、当センター漁獲統計システムによる漁獲統計と各漁業者に依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用ならびにエッチュウバイの価格動向について検討を行った。また、資源生態調査として、JFしまね大田支所ならびに仁摩支所に水揚げされた漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、銘柄別漁獲量から本種の殻高組成を推定した。

(1) 漁獲動向

2011年のばいかご漁業における総漁獲量は73.0トン、総水揚金額は3,000万円であった。また、1隻当たりの漁獲量は18.3トン、水揚げ金額は750万円であった。漁獲量、水揚金額ともに前年を上回ったが、平年比で見ると漁獲量は平年並みであったが、水揚金額は12%下回った。

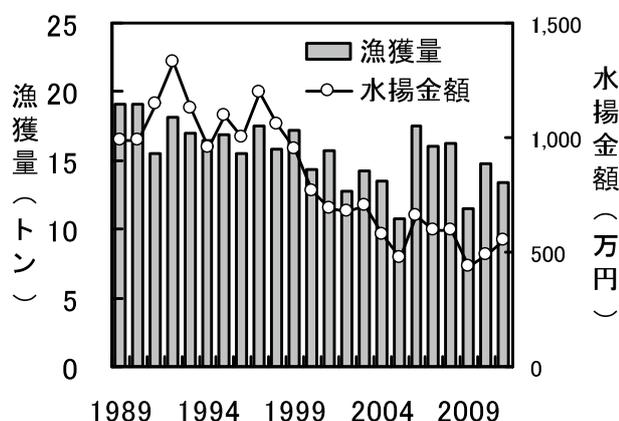


図21 ばいかご漁業におけるエッチュウバイの1隻当たり漁獲量と水揚金額の推移

図21にエッチュウバイの1隻当たり漁獲量と水揚金額の推移を示す。漁獲量は、1990年代は横這い傾向にあったが、2000年代には年変動が大きくなり、2006年に一時増加したものの、その後は減少傾向にある。一方、水揚金額は、1992年をピークに減少傾向にあったが、最近年は横ばい傾向ある。2011年のエッ

チュウバイの漁獲量は53.5トン、水揚金額は2,215万円であった。また、1隻当たりの漁獲量は13.4トン、水揚金額は554万円であり、量、金額とも平年(過去10年平均)をやや下回った。

(2) 資源動向

図22にエッチュウバイの1航海当たり漁獲量と漁獲個数の推移を示す。

2011年の1航海当たり漁獲量は500kgであり、前年を下回ったが、平年を13%上回った。また、1航海当たり漁獲個数は7,674個であり、前年を下回り、2005年、2009年に次ぐ低い値となった。1999年までは1.4万個前後で推移していたが、2000年以降、1万個を下回ることも多くなり、資源水準としては低位状態にあると推測される。

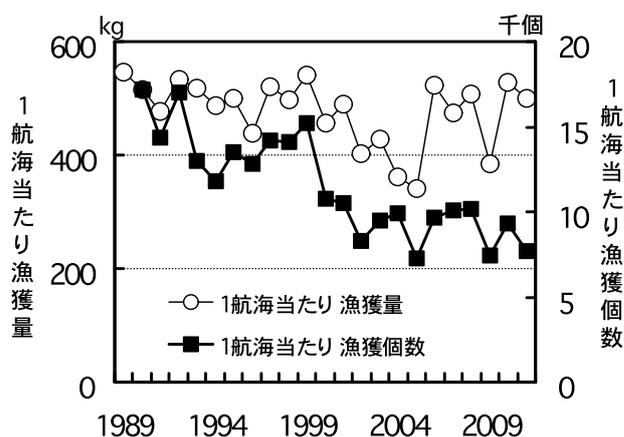


図22 ばいかご漁業におけるエッチュウバイの1航海当たり漁獲量と漁獲個数の推移

図23に銘柄別水揚げ箱数の推移を示す。1993年は「中」銘柄が多く、「豆」～「中」銘柄で全体の7割弱を占めていた。2000年代に入り、「大」銘柄の割合が高まり、「中」、「小」銘柄の割合が低くなっていった。2011年は、それまで1/2近くを占めていた「大」銘柄の割合が減少し、「小」、「豆」銘柄の割合が増加した。銘柄組成に変化が見られたが、依然として「大」、「特大」といった大型貝が全体の1/2を占めており、大型貝主体の漁獲状況となっている。

図24にエッチュウバイの殻長組成を示す。年を追うごとに小型銘柄の山が小さくなる傾向が見られ、このことから漁獲物の大型化の傾向が窺える。かつて、資源が良好であった頃に

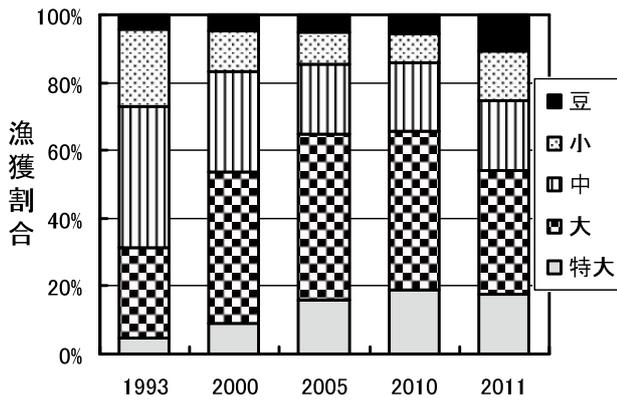


図 23 銘柄別水揚げ箱数の推移

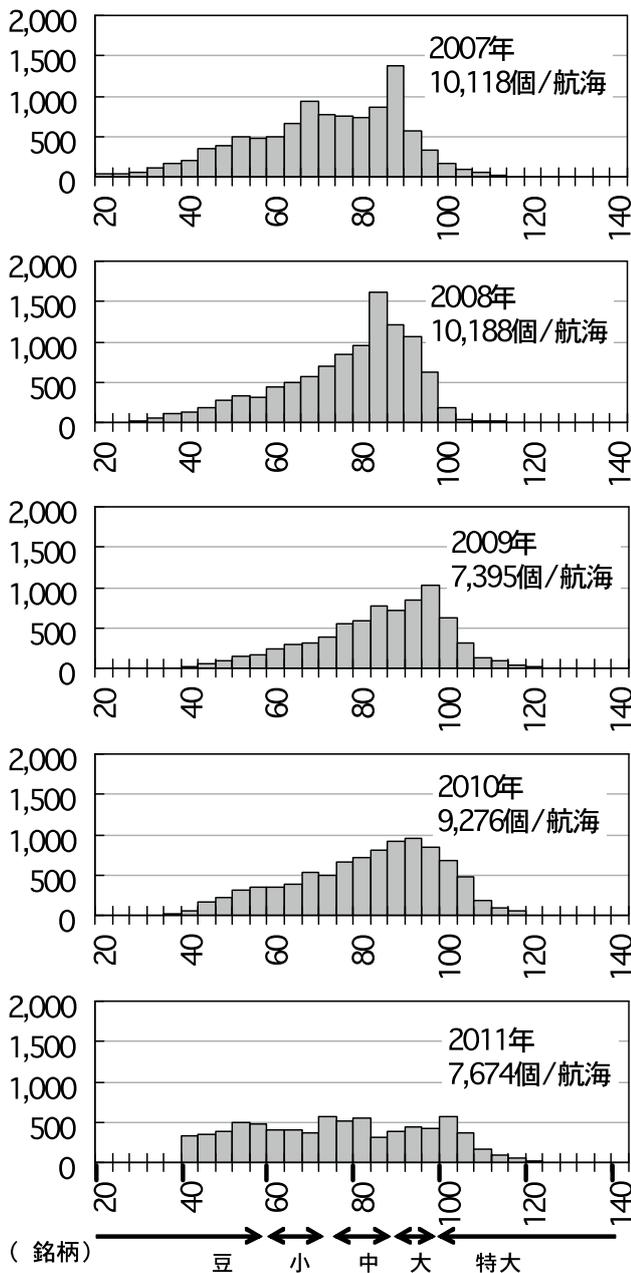


図 24 エッチュウバイの殻長組成の推移個数は 1 航海当たりの漁獲個数

は体長組成も二峰型であり、殻長 60mm 前後にモードが見られた。しかし、2005 年以降の組成では、一部、二峰型を示す年も見られるが、2008 年、2009 年のように大きいサイズに偏った短峰型を示す年が多く、このことから漁獲物の主体が大型貝に移行していることが窺える。2011 年の特徴としては、今までの組成と異なり、大きなモードが見られない組成となっている。特に過去に見られた殻長 80 ~ 100mm サイズのモードが小さくなっており、このサイズの減少が著しい。一方、量的には多くはないが、殻長 60mm 以下のサイズは過去に比べ多く漁獲されている。

(3) 漁場

漁場は、江津沖の水深 200 m 付近から日御碕沖の水深 230 m を利用した。今年は例年利用していた日韓暫定水域東側の利用は見られなかった (図 25)。

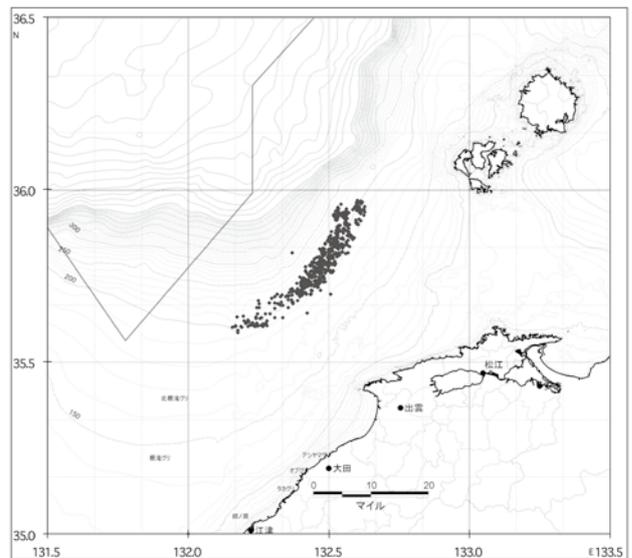


図 25 2010 年漁期に利用した漁場

(4) 魚価の推移

エッチュウバイの 1kg 当たりの平均価格は、前年を 26% 上回り 413 円であり、2005 年以来久しぶりに 400 円台を上回った。石見部においては、1990 年以降、魚価は下落傾向にあり、近年は 350 ~ 380 円で横這い傾向にある (図 26)。各船とも鮮度保持による魚価向上を目指し、冷海水装置を導入しているが、夏場は国内各地でバイかご漁業が行われ、消費者市場では

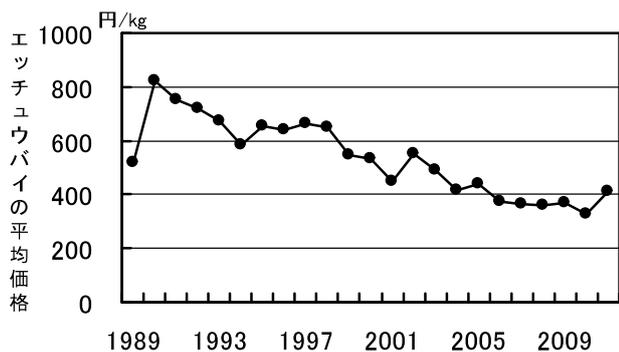


図 26 エッチュウバイの1kg当たり平均価格の推移

本種が供給過剰状態にあるといわれている。さらに石見部では、高値で取引される銘柄「特大」や「小」、「豆」の漁獲量が少ないため、鮮度保持だけでは魚価上昇が見込めない状況におかれている。

銘柄別価格 (図 27) を見ると、銘柄「中」以外の銘柄で地区による価格差が見られた。

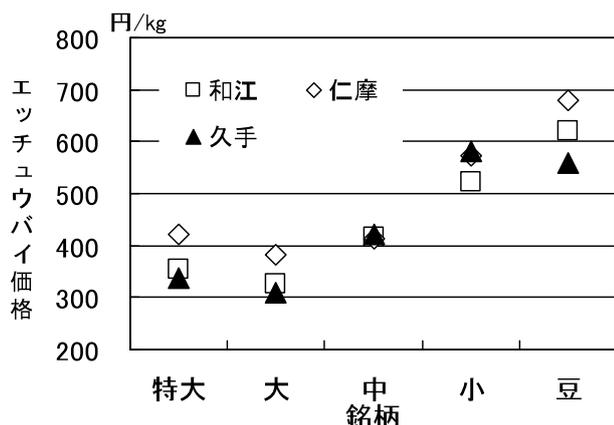


図 27 エッチュウバイの地区別銘柄別価格の動向

仁摩地区では「特大」、「大」、「豆」銘柄が他地区より高値で推移した。一方、和江、久手地区では「特大」～「中」銘柄では価格に大きな差は見られなかったが、「小」、「豆」銘柄では価格差が見られた。この二銘柄の価格差については、出荷量の少なさに加え、各地区の選別サイズの違いが影響している可能性が考えられた。

また、過去3年の平均価格と比較したところ、「特大」～「中」銘柄では過去3年の平均価格を上回ったが、「小」、「豆」銘柄では下回った。
(5) 資源状態

今漁期の推定漁獲率は20.3%であり、1998年以降最も低い値となった。漁獲の中心は過去の傾向と異なり、2～4歳であり、次いで5,6歳の漁獲数が多かった (図 28)。年齢組成としては、広い範囲の年齢群を漁獲している傾向が見られた。

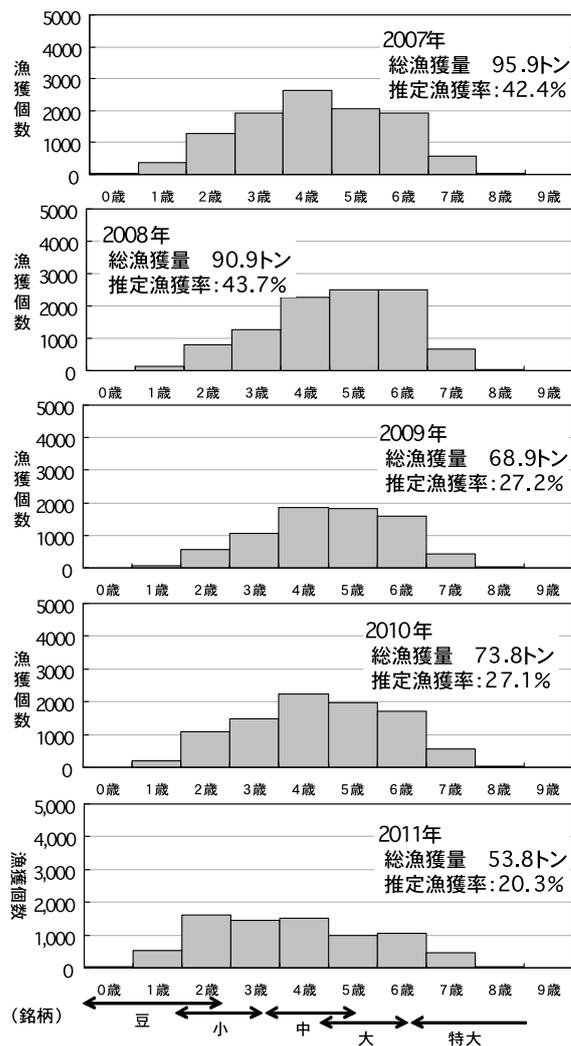


図 28 漁獲物の年齢組成